

【6】 中学部の生徒にみられた「からだづくり」の成果 表24 からだづくりの成果の観点

「やる気のある、自由にこなせる、頑張れるからだ」。我々はこのからだづくりに(1)運動、(2)生活単元学習、(3)健康管理の3つから取り組んできた。このからだが中学部の生徒に「自分らしい表現で仕事や運動に力いっぱい取り組む

- ・あることに自分から興味を示して、意欲的に、積極的に取り組んでいった事実
- ・言われないのに自分から進んで何かに取り組んだ事実
- ・今までしなかったことをしようとした事実
- ・今まで出来なかったのに出来たとか、しようががんばった事実
- ・こんなにがんばれ、耐えられた、我慢できた、自分をごんばらせた、自分をコントロールできた、少々のことへこたれなかった等……の事実
- ・友だちとこんな関係が作れた、先生にこんな反応をした、友だちを助けてあげた、集団におくれないでついていけた……等の事実
- ・こんなに大人らしくなった、責任をもってやりだした、良く分かり出した……等

姿」として表われることを期待して実践してきた。その成果の表われ方や表われるまでの期間は個人によって異なり、評価尺度やテストで測ることは難しい。しかし、中学部の生徒にからだづくりを通してめざすことは、自分自身を知る思春期らしい自己確認、自己確立であることをポイントに、上の表23に示した観点で生徒の姿を見つめた時、すばらしい数々の成果を見つけることができる。

しかし、成果には「充実期と飛躍期」があり、その表われ方も時期的にずれがある。つまり、今培った力がその場で成果として表われないで、蓄積されて半年後、遅い人は1年後、2年後になって発揮される例が少なくない。その子なりの素晴らしさを認めると同時に、期待する心で生徒たちを見つめながら、成果が熟するのを待つ姿勢も大切である。

以下、実態調査に見られる変容及びそれ等を背景にした内面世界の変容からくる素晴らしい姿を、マラソン大会、さざなみ作業所での実習、その他の生活等からからだづくりの成果として述べる。

(1) いろいろな実態調査に見られた変容 (H. 3. 9)

① MEPA及びからだの輪郭表に見られた変容

80頁図9のU子の例が示す様に、殆どどの生徒に年に2～5項目の変容が見られる。これはMEPAも同様である。検査項目が生活活動に近いと、経験の拡大が直接的にプラスに働きかけていると考えられる。U子の例で分るように、全般的に変容は、粗大運動から微細運動への移行が見られる。



細いカッティングができたR男

② MSTBに見られた変容

79頁図8に示すのは、N子の昨年5月からの変容である。からだの輪郭表と同様、粗大運動より微細運動の伸びが大きく、作業や手仕事を学習にとり入れる大切さを伺うことができる。

右図16は、1年生A子の5月から9月の変容を略図で示したものである。この例のように、1年生は例年5月に比べ9月の得点がかかなり高くなる。検査への慣れや緊張の減少も手伝って

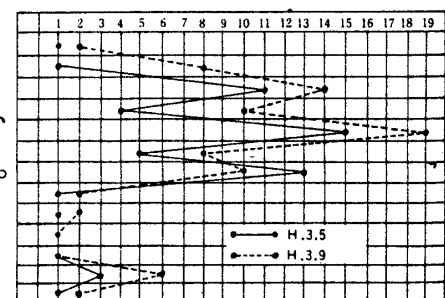


図16 A子のMSTBの変容

いるが、中学部の運動、遊びの労働からの取り組みが1年生に大きな刺激になっていること、やる気を育てていることが、生活の実態と併せ見た時に強く感じられる。

一方、123頁K男の例に示す様に、発達の遅れの大きい生徒には1年間の長期間にわたっても、得点に中々結びつかない例が多い。しかし、その出来方、やり方には種々変化が見られており、ここに変容をとらえる目を向けていきたい。

③ 意欲・態度・段階別教育内容

表25 U子の入学時からの意欲・態度の変容

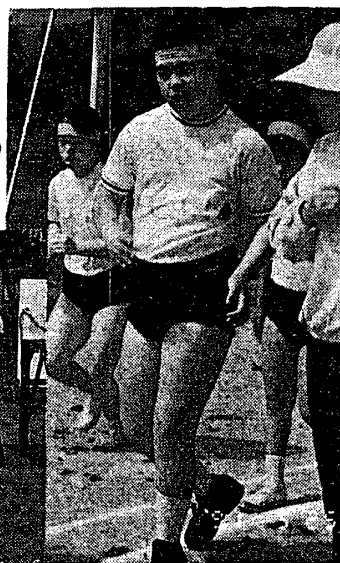
右表25に示すように、U子は、自閉的という気質を引きずりながらも、「やる気のある、がんばれる、友だちと協調できる」からだをめざして取り組んだ結果、少しずつではあるが意欲・態度の評価段階を一歩ずつ

	興味・関心、やる気、自制心、集団参加の様子
1年	・友だちと一緒にいても意識していない。興味・話題の範囲が狭い。 ・やりたい事、自分の興味に引かれるままにすぐ行動してしまう。
2年	・友だちと一緒にいるし、共通の話題にのれるが、一人活動を好む。 ・具体物での見通し・目的がはっきりしていると指示でやる気を持つ。
3年	・みんなと一緒にいて、指示で協力や援助をしようとする。 ・言語化して自分に言いきかせてがんばったり、承認を求めたりする。 ・指示され、見通しが持てると積極的に取り組む。

登ってきていることが分かる。また、段階別教育内容の習得も73頁のR子の例が顕著に示している。以上のいろいろな実態調査の変容は、以下に示すいろいろな場面での変容につながっていると考える。

(2) マラソン大会に見られた成果 (H. 3. 5)

新学期に入って1か月後に実施されるマラソン大会は、充実期を経過した今迄のからだづくりの成果を問うものと考えた。記録そのものは勿論、自分を励ましながらか最後までやり遂げる、黙々とがんばる取り組み姿勢の中に、その成果を多く見る事ができた。



① 15分かかったが、始めて1500mを完走したK男

肥満、下肢の筋力の弱さ、甘えと、マラソンには全く不適當なからだのK男は、今迄、1500mを走らせることができなかった。今年は、担任の励ましの声かけを受けながら、マイペースで、自力で1500mを完走した。見学した親と共々やり遂げた満足感、喜びは大きかった。



よく走り続けたR子・M男

② 黙々と小走りに1000mを走り続けたR子

R子は若年性リュウマチで運動制限があり、サーキットや体育では適度なメニューを黙々とこなしている。マラソン大会では走り方、タイムをマイペースにし、距離は皆と同じように走ることを納得し取り組んだ。はらはらする担任をしり目に黙々と小走りに1000mを完走し、満足感を持った。

③ 歯をくいしばって、最後まで高等部の生徒にきついていたS男

運動は好きだが長距離走は、始めのペースを保持できなくて入賞は中々難しかった。3年になって特に見えてきた「やる気と自己目標達成意欲」に支えられ、高等部の先頭グループに最後まで、歯をくいしばって付いて走り、堂々3位に入賞、1500mに6分3秒という新記録を樹立した。

(3) 佐治(地名)のアスレチックで大奮闘し、思い切り楽しんだ生徒たち (H. 3. 5)

昨年10月、こどもの国と大山でアスレチックに挑戦した。この時は通過困難なポイントが多く、立往生したり、助けを求めたりする姿が多かった。今年の5月、佐治でアスレチックに再挑戦した。

「サーキットを頑張ってアスレチックに挑戦しよう!!」と、その日までの気持の盛り上げも効を奏してか、昨年の難しさに匹敵する高い板塀登りやつり橋等に自らを励まし、お互に助け合ってやり遂げ、喜々として楽しむ2・3年生の姿があった。これは昨年の姿と、また1年生の姿と大きな違いが見られた。



(4) プールおさめに見られた成果 (H. 3. 9)

① とび込みを披露

M男は緊張すると筋肉が硬直し、持てる力を中々発揮しにくいタイプである。このM男がプール納めで多くの人の前でとび込み、足をつきながらも20m泳ぎ切



とび込みをするT男

こわくないぞ、がんばれ

った。黙々と飛び込み練習に取り組み、人前でも踏んばって飛び込めた姿こそ成果ととらえたい。

② クロール、平泳ぎで200m泳ぎ切ったA子

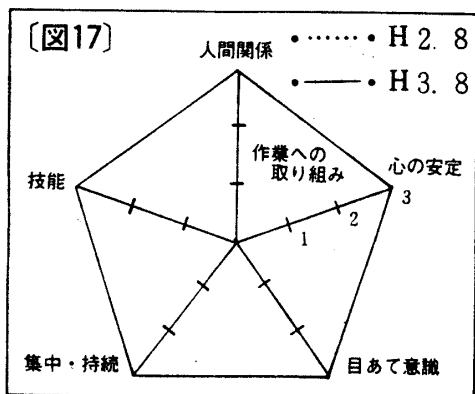
A子は小学部からの連絡入学生で、小学部でのからだづくりの成果を蓄わえて入学してきた。中学部の少し大人らしい生活の中で、今迄蓄わえた力をぐんぐん出している。このプール学習でも自ら限界に挑戦し、二つの泳ぎで200mを完泳し、水泳学習の成果を示すと同時に、これ迄やや不足していた「ふんばる力、最後まで頑張る力」が育ってきていることを示してくれた。

以上の二例に代表される様に、水泳ではどの生徒も多くの成果を示している。特にプールおさめでは、記録も泳ぎ方も練習時を上回っており、課題に直面した時にふんばれるからだの底力の育ちを感じた。

(5) さざなみ作業所の様子に見られた成果 (H. 3. 8)

次に示す図17は、さざなみ作業所での様子を把握するグラフとその観点を示したものである。

実態把握のグラフとその観点



〔心の安定〕	〔目的意識〕	〔技能〕
1. パニックが出たり、それに近い状態になる。	1. 言われてシールを貼る。	1. 介助を受ければ、少しずつできる。
2. 仕事に安定して取り組める。嫌がらない。	2. シールが増えるのを喜び、比べる。	2. 1人でできるが時々ミスがある。
3. 楽しんで通い、充実感を持って帰る。	3. 目標、目的を決め近づくの喜び。	3. 1人でやりとげ、検査もできる。
〔人間関係〕	〔集中・持続〕	
1. 指示で、友だちと同じ行動をとる。	1. 途中で場を離れ、中断する。	
2. 友だちと遊んだり、あいさつをする。	2. 日課に沿った生活をする。	
3. 友だちを助けたり、励まし合う。	3. 自ら、1日勤務ができる。	

中学部では今年の夏休みも、本校の保護者と教師で作ったさざなみ作業所での作業を、生活計画の中に織り込むことを奨励し、生活リズムの保持と働く態度の育成を図った。上の図17に示す評価の視点で取り組みの概要をつかみ、昨年(1年生は4月)との比較からその成果をとらえてみる。

<p>図18 人間関係</p>	<p>H子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月には、手元を集中して見たり、続けて作業をしたりすることは難しく、半日で40個の製品を作るのがやっとであった。 ・夏休みは午前中の参加であったが5日間と予想以上に参加し、平均半日で200個の製品を仕上げた。集中・持続力等の向上が分かる。
<p>図19 人間関係</p>	<p>Y子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年は通う意欲もなく、一日中家でごろごろしていた。 ・今年は、時々遅刻をしたが14日間参加し、全日作業に取り組めた。途中で殆んど席を立たず、ゆっくりではあるが着実に仕事をこなした。この参加意欲と持続力は、昨年は殆んど見られなかった。
<p>図20 人間関係</p>	<p>R子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年は体調も不調で1日も参加しなかった。その意欲もなかった。 ・今年は病院の帰り、友だちのお母さんと一緒にと4日間参加し、全日作業に取り組めた。金具を押す力がだんだん強くなり、不良品をほとんど出さなくなった。材料の要求等、言葉で言えだした。
<p>図21 人間関係</p>	<p>S男</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年は意欲がなく、決められた3日間で終わった。 ・今年は自分から作業所に通うことを決め、1人でバス通勤する練習もしてきた。行事のある日以外は殆んど通勤し、自分で判断しながら日課に沿った生活ができた。仕事も去年の3倍以上できた。

「さざなみ作業所」は、自分で、自分なりにがんばる作業所であり、何も強制されるものではない。にもかかわらず、今年の夏は、ピーンと張りつめた雰囲気のある実習であった。生徒たちの仕事に対する取り組みが「言われなくても、場に応じた心がまえになって」と、だんだん社会化されていっつつあることが分かる、ふんばりのある実習であった。

(5) 夏休みや2学期の生活に表われた成果

136頁でも述べた様に、からだづくりの成果は本当に「生きて働く力」であればある程、時期的なずれを伴いながら、いろいろな形で表われてくる。2・3年生には5月頃から、1年生には8月頃から発揮されてきている。次に示すのはその一例である。



「さざなみ作業所」でがんばる

- ・夏休み中、自分で木工具を使った遊びを工夫し、金づちやのこぎりを使って黙々と取り組み、花台を作った (M男)
- ・電動ろくろで小鉢が作れだし、真剣に、黙々と目標の100をめざして取り組んだ。評価も求められた (S男)
- ・上級生と一緒に運動会の実行委員会で働き、スローガンの旗を書いたり、放送で集合を告げる等の活躍ができた (A子)
- ・ピアノ鼓隊で電動ピアノを担当。当日スタートでつまづいたが、落ちついて立て直しができた (M子)
- ・運動会のほとんどの種目を一人でやりとげ、走る力もついてきた (K男) ・笑顔がとて多くなった (K男)
- ・通院以外、行事明けでも休まず登校し、先生への話しかけや笑顔が多くなった (R子) ・悲しい時立けた (R子)
- ・夏休み中、牛の世話を引き受け、家族の一員としてなくてはならない存在となった。仕事ぶりもしっかりした (S男)
- ・教生の先生とのお別れ会を計画し、席順の絵を書いたりプレゼントを作ってきたりし、自分たちでやろうとした (U男)

以上実態調査、いろいろな生活場面での生徒の変容、成果を事例的に述べてきた。「指示され、見通しが持てれば積極的に取り組めだした」R子や、「得意なことでもなら頑張れだした」K男等、多くの生徒にその成果は見られる。しかし「こだわりに自分を制し切れなくなっている」N子、「不眠で

パニックが増加している」U子等、退行的な現象もあり、思春期の波を乗り切らせる難しさを痛感すると同時に、この現象も青年期への一つの通過点としてとらえ、次期での安定を見通していきたい。

〔7〕 考察と今後の課題

中学部の生徒にとってからだづくりとは何かに悩んだ初年度、中学部の生徒のからだづくりに「楽しんで力いっぱいからだを動かす」姿をイメージし、「遊び的労働を重視した生活単元学習」を導入した2年次、どうしたらどの子も「楽しんで力いっぱい……」の姿が実現できるかと「授業づくり」に力を入れた3年次、「授業づくり」を更に進めながら、過去の取り組みをもう一度見直したり確認した4年次と、からだづくりへの取り組みも4年を経過した。どの年も悩み、模索しながらの実践であったが、教師集団で真剣に討議し取り組んだ貴重な4年間の積み重ねだった。

「からだ」をあえて強調しながら、身体だけではなく心を含めたからだづくりこそ発達と障害に応じた教育には欠かせないものであり、その根底には「強制される、やらされる」教育ではなく、「意欲を持って、楽しく取り組む」教育の大切さを強調する結果となった。特に身体の急速な発達だけでなく心理的に揺れ動く中学部の生徒にとって、身体に直接的に働きかける取り組みと同時に、「やりたいことで、自分たちで見つけながら……」といった生活単元学習への取り組みで「意欲・やる気・集中力」等の心づくりを重視したことは大切な取り組みであった。ここで培った豊かな心が高等部教育で底力として花開き、社会的自立に向けて邁進する生徒たちの原動力になることを確信する。

指導に関しては、4年間の実践で常に次の3点が課題として残っていった。

- ① どの子にも楽しんで取り組める題材選定、教材・教具の工夫、援助や手だて。
- ② 学習したことが着実に積み上っていく指導計画の立て方、記録のとり方。
- ③ 育ち、伸びてくる子どもをどう捉え評価するか、評価法とその尺度。

これ等は、障害児教育にとって日常的であって永遠の課題として、次のテーマに引き継いで行きたい。

テーマは変わっても障害児教育は、その遅々たる発達を信じ、一人ひとりを大切にしながら、一人ひとりに合った社会での自立をめざしていくことは不変であり、そこで問われるのは教師の確固とした教育観である。教師がどれだけ暖かく生徒を理解し、真剣にぶち当たっていくかが一人ひとりをその子らしく生かせるかどうかの根本的な違いである。この4年間の多くて実践が、その教師像の上に立ったものであることを実感している。どの子もその子らしく生かせる教師で常にありたい。

◎尚、文中の生徒名はすべて仮称であり、その発達と併せ持つ障害は次の通りである。

1年	発達の程度	障 害	2年	発達の程度	障 害	3年	発達の程度	障 害
Y男	4.0～5.0歳	ダウン症	K男	2.5～3.0歳	ダウン症	S男	7.0～8.0歳	言語障害
T男	4.0～5.0歳	てんかん	Y子	4.5～5.5歳	情緒不安定	R男	7.0～8.0歳	CP後遺症
U男	6.0～7.0歳	プラタウィリー	M子	6.5～8.0歳	情緒不安定	N子	5.5～6.5歳	自閉的傾向
H子	4.0～6.0歳	CP後遺症				U子	5.5～6.5歳	自閉的傾向
A子	6.0～7.0歳	ダウン症				R子	4.0～5.0歳	ダウン症